令和四年度学校文集【令和四年六月その一】

ひらやま　三号

馬で散歩

六年一組　河野　裕介

ぼくはこの朝、馬に乗って山を一周散歩しました。最初は馬を進ませたり、とめたり、曲がらせたりするレッスンを受けました。

山の中へ行きました。下の準備できたら、さっそく上にいました。ぼくは重心を前に進んでいきました。馬の背をなでながら、声をかけました。行くと中に霜柱がたってきました。馬がふむと、シャリッ、という音がして、気持ちいいなかんじでした。さらに進むと、平らな所にでました。そこからはのんびりゆっくり行きました。慣れなかった馬との慣れても、三十分ほど乗ってきて、リラックスできるようになりました。散歩が終わって、馬から乗っていた足がおりました。

ブルブルしてなかなかぬけなくなると、馬とも仲良くなったりしました。

【夕刊デイリー『光の子』令和四年四月二十二日】

命のたんじょう

六年一組　髙木　蓮斗

小さな命ぼくは一つしかないそれは命だお父さんお母さんからもらった大切な命そんなぼくに妹ができた小さくてとてもかわいい命初めてのだっこはこわかった小さな命に感動してなみだが出たとてもうれしいしゅん間だった小さな小さな命ぼくの妹になってくれてありがとうぼくはこの一つの命を大切にする

【夕刊デイリー『光の子』令和四年四月二十二日】

不思議な散歩

六年二組　久保　心羽

今日、私は久しぶりに家の周りを散歩しました。普段あまり一人で歩くことはないのでとても不思議な感じでした。すると、一匹の猫と目が合いました。びっくりしました。私も猫もそしたら、いきなり私の方に向かってきました。だけど、猫は、私の足元で5秒ほど止まりました。走ってどこかに去っていきました。本当に怖かったです。

いつもは猫や鳥などを見られる自分から行って、逃げられる動物だけど、ご持ちが今日は違いました。気の毒なことに追われる動物の猫だけ分かりました。その一つ分かりました。ある猫は片足がなく、二年のころに一回だけ会ったことがあります。そのころ、写真を撮っていたので、家に帰ってみました。

【夕刊デイリー『光の子』令和四年四月二十二日】

あこがれの偉人

六年三組　佐藤　琉

ぼくは、あこがれている偉人が文います。その人の名前は、伊藤博文さんです。伊藤博文さんは、明治生まれの政治家で、初代内閣総理大臣になりました。彼は、三度も総理大臣になった後、伊藤博文さんは、何度も総理に伊藤博文さんは、何度も総理になったことがあります。ぼくが最もすごいと思うことは、部分が、日本最年少総理大臣であるそのことは、四十四才だから、部分が、その記録は破られていないといえます。伊藤博文さんは、明治時代の政治家で、総理大臣になった人です。ぼくは、伊藤博文さんのことを思うと、社会の中間の養子になった武士の身分が低いことを思います。部分のあるのは、幸運にも、身分が高かったけど、時代は、運がよくて、身分が低くなりました。最後に、ぼくも、伊藤博文さんのように、自分の立場や、身分がなりたいと思います。

【夕刊デイリー『光の子』令和四年四月二十二日】

タやけ

六年三組　中原　羽香

青色　水色　オレンジ　ピンク　むらさき　タ同じ色の空は二度とない　絵に描いたようが毎日毎日ちがう色　やけ辛いこと悲しいこと楽しいこと　空私のいろんな気分も毎日ちがう　の色自分のけんな色がいっぱい　きたいやろ空のようにあっていい

明日はどんなタやけ空が見れるかな

【夕刊デイリー『光の子』令和四年四月二十二日】

赤ちゃん

六年三組　古川　佳

「おぎゃー　おぎゃー。」おねえちゃんの赤ちゃん泣いて元気なお可愛いなすぐふ赤ちゃんとろいもいるすやすやとぜ顔をやすもろ気持ちれんぜをさすわっねてちよてあげたおてたてもしよさそうきてもまったなぎゅーと近づけた手にぎってくれたちっちゃい手かい

【夕刊デイリー『光の子』令和四年五月十四日】